観経正宗分定善義巻第三

沙門善導集記

正宗分

定善

これより已下は、次、正宗を弁ず、すなわちその十六有り。還って一一の観の中に就いて、文に対して料簡せん。労わしくあらかじめ顕わさず。今、正宗を定立すること諸師と同じからず、今、直に以て法に就いて定めば、日観の初めの句より下、下品下生に至る已来は、これその正宗なり。日観より已上は多義の不同有りといえども、この文勢を看るに、ただこれ由序なり。知るべし。

日観（日想観）

初めの日観の中に就いて、まず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその五有り。一に「仏告韋提」より、下「想於西方」に至る已来は、正しく総告総勧を明す。これ韋提、前に弥陀仏国を請し、また、正受の行を請するに、如来、時に当りて、すなわち為に説かんと許したまう。ただ機縁いまだ備らざれば、行を顕わすこと、いまだ周からざるを以て、更に三福の因を開きて、以て未聞の益を作し、また如来重ねて告げ

て、流通を勧発したまう。この法、聞き難ければ、広く開悟せしむることを明す。「仏告韋提汝及衆生」と言うは、これ告勧を明す。もし等しく塵労を出でて仏国に生ずることを求めんと欲せん者は、宜しくすべからく意を励ますべしとなり。「応当専心」と言うより已下はこれ衆生散動にして、識、援猴よりはなはだしく、心、六塵に偏して、しばらくも息むに由し無し。ただし境縁一に非ざるを以て、目に触れて貪を起し想を乱る、心を三昧に安ぜんこと、何ぞ、得べけん。縁を捨て静に託するに非ざるよりは、相続して心を注めんや。直に西方を指して余の九域を簡ぶことを明す。ここを以て、身を一にし、心を一にし、回向を一にし、処を一にし、境界を一にし、相続を一にし、帰依を一にし、正念を一にす。これを想成就して正受を得と名づく。此世後生、心に随いて解脱す。二に「云何作想」より、下「皆見日没」に至る已来は、正しく所観の事を牒することを明す。これ諸〳〵の衆生等、久しく生死に流して、安心を解らざれば西方を指すといえども、云何が作意することを知らず。故に如来をして、為に反問を生じ疑執を遣除して、以て正念の方を示さしむることを明す。「凡作想」と言うは、これ総じて前の意を牒して、後の入観の方便を顕すことを明す。「一切衆生」と言うは、総じて得生の類を挙ぐ。「自非生盲」と言うより已下は、これ機の堪と不堪とを簡ぶことを明す。「生盲」と言うは、母胎の中より出でて、眼すなわち物

を見ざる者を名づけて生盲という。この人には日観を作さしむることを得ず。日輪の光相を識らざるに由るが故に。生盲を除いて以外、縁に遭いて患う者には日観を作さしむるにことごとく成就することを得。いまだ眼を患わざりし時、その日輪の光明等の相を識るに由りて、今目を患うといえども、ただ善く日輪等の相を取らしめて、正念に堅持して時節を限らざれば、必ず成就することを得。問うて曰く、韋提の上の請には極楽の境を見んと願ず、如来の許説に至るに及んで、すなわち、まず心を住めて日を観ぜしむるは、何に意か有るや。答えて曰く、これに三意有り。一には衆生をして境を識りて心を住めしめんと欲す。方を指すこと在ること有り、冬夏の両時を取らず、ただ春秋二際を取る。その日、正東より出でて直に西に没す、弥陀仏国は日の没する処に当って、ただちに西のかた十万億刹を超過す、すなわちこれなり。二には衆生をして自の業障に軽重あることを識知らしめんと欲す、云何が知ることを得。心を住めて日を観ぜしむるに由る。初めて心を住せんと欲する時、教えて跏趺正坐せしむ。右の脚、左の腿の上に著けて外と斉し、左の足、右の腿の上に安いて外と斉し。左の手、右の手の上に安いて、身をして正直ならしめ、口を合して歯相い近くること勿れ。舌上噤を柱えよ。咽喉および鼻中の気道をして宣通せしめんが為の故に。また身の四大内外ともに空にしてすべて一物無しと観ぜしむ。身の地大の皮肉筋

骨等、心に想え、西方に散向すと。西方の際を尽して、乃至、一塵の相を見ず。また、想え、身の水大の血汗津涙等、心に想え、北方に散向すと。北方の際を尽して、乃至、一塵の相を見ず。また、想え、身の風大、東方に散向すと。東方の際を尽して、乃至、一塵の相を見ず。また、想え、身の火大、南方に散向すと。南方の際を尽して、乃至、一塵の相を見ず。また、想え、身の空大、すなわち、十方の虚空と一合すと、乃至、一塵不空の相を見ず。また、想え、身の五大皆空にして、ただ識大のみ有り、湛然として凝住す。なおし円鏡のごとく内外明照にして朗然清浄なりと。この想を作す時、乱想除くることを得て、心ようやく凝定す。然して後、徐徐として心を転じて、諦かに日を観ぜよ。その利根なる者は一坐にして、すなわち明相現前するを見ん。境の現ずる時に当りて、あるいは銭の大きさのごとく、あるいは鏡面の大きさのごとし。この明の上に、すなわち、自ら業障の軽重の相を見る。一には黒障、なおし黒雲の日を障うるがごとし。二には黄障、また黄雲の日を障うるがごとし。三には白障、白雲の日を障うるがごとし、この日、雲障に猶るが故に、朗然として顕照することを得ず。衆生の業障も、また、かくのごとし。浄心の境を障蔽して、心をして明照ならしむること能わず。行者、もしこの相を見ば、すなわち、すべからく道場を厳飾して、仏像を安置し、清浄に洗浴して浄衣を著し、また名香を焼いて諸仏一切の賢聖に表

白し、仏の形像に向いて現在の一生に、無始より已来、すなわち、身口意業に造る所の十悪、五逆、四重、謗法、闡提等の罪を懺悔すべし。極めてすべからく悲涕して涙を雨し深く慚愧を生じ、内、心髄に徹り骨を切りて自ら責むべし。懺悔し已りて還りて前の坐法のごとく、安心して境を取れ。境もし現ずる時、前のごときの三障ことごとく除いて、所観の浄境、朗然として明浄ならん。これを頓に障を滅すと名づく。あるいは一懺してすなわち尽すを、利根の人と名づく。あるいは一懺にただ黒障を除き、あるいは一懺に黄白等の障を除くことを得、あるいは一懺にただ白障を除く、これを漸除と名づく。頓滅と名づけず。すでに自ら業相のかくのごとくなるを識りなば、ただ、すべからく勤心に懺悔すべし。日夜の三時、六時等に、ただ憶してすなわち懺することを得るは、最もこれ上根上行の人なり。譬えば湯火の身を焼くに、また覚すればすなわち却がるがごとし。あに徒らに時を待ち、処を待ち、縁を待ち、人を待ちてまさに始めて除くべけんや。三には衆生をして弥陀の依正二報、種種の荘厳光明等の相の内外照曜して、この日に超過すること百千万倍なることを識知らしめんと欲す。行者等、もしかの境の光相を識らずんば、すなわち、この日輪の光明の相を看よ。もしは行住坐臥に礼念憶想して、常にこの解を作せ。久しからざる間に、すなわち、定心を得てかの浄土の事の快楽荘厳を見ん。この義に為るが故に、

世尊、先に日想観を作さしめたまう。三に「当起想念」より、下「状如懸鼓」に至る已来は、正しく観察を教う。これ身の威儀を正して、面を西方に向え、境を守り、心を住めて堅執して移らざれば所期皆応ずることを明す。四に「既見日已」より、下「明了」に至る已来は、観成の相を弁ず。これ心を標して日を見るに、想を制し縁を除いて、念念移らざれば、浄相了然として現ずることを明す。また行者初めて定中に在りて、この日を見る時、すなわち三昧定楽を得て、身心内外融液して不可思議なり。これを見る時に当って、好くすべからく心を摂して、定をして上心の貪取を得ざらしむべし。もし貪心を起せば心水すなわち動ず。心、動ずるを以ての故に浄境、すなわち失す。あるいは動、あるいは闇、あるいは黒、あるいは青黄赤白等の色にして安定することを得ず。この事を見る時、すなわち自ら念言せよ。これ等の境相揺動して安からざることは、我が貪心、念を動ずるに由って、浄境をして動滅せしむることを致すと。すなわち自ら安心正念にして還って本に従って起せば、動相すなわち除いて、静心還りて現ず。すでにこの過を知らば、更に増上の貪心を起すことを得ざれ。已下の諸観の邪正得失、一らこれに同じ。日を観じて日を見るは心境相応すれば、名づけて正観とす。日を観ずるに日を見ずして、すなわち、余の雑境等を見るは心境相応せず。故に邪と名づく。これすなわち娑婆の闇宅には事に触れて、以て比

方する無し。ただ朗日の輝きを舒ぶるのみ有りて、想を寄せて遠く極楽を標す。五に「是為」より已下は、総じて結す。上来五句の不同有りといえども、広く日観を明し竟んぬ。

二に水観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその六有り。一に「次作水想」より、下「内外映徹」に至る已来は、総じて地体を標す。問うて曰く、前に日を観ぜしむるは業相等を知らしめんが為に、故に日を観ぜしむと。今この観の中に、また、水を観ぜしむるは何の所以か有る。答えて曰く、日輪の常照は以て極楽の長暉を表す。また恐らくはかの地平かならずして、この穢国の高下に類せんことを。ただし娑婆の闇宅には、ただ日のみ能く明なり。この界の丘阬にして、いまだ高下無き処あらざるを以て、能く平なる者を取らんと欲するに水に過ぎたる無し。この可平の相を示して、かの瑠璃の地に況う。また、問うて曰く、この界の水は湿うて、かつ軟かなり、未審し、かの地もまたこの水に同じきや。答えて曰く、この界の平水は、以てかの地の等しうして高下無きに対す。また、水を転じて氷と成すことは、かの瑠璃の地の内外映徹するに対す。これ弥陀、曠劫に等しく行じて偏無く、正習ともに亡じて、能く地輪の映徹を感ずることを明す。また、問うて曰く、すでに水を想して、以て、心を住し、水を転じて、以て、氷と成し、氷を転じて、以て、瑠璃地と成

水観（水想観）

さしめば、云何が作法して、境をして現ぜしめんや。答えて曰く、もし住身の威儀は一ら前の日観の中の法に同じ。また、水を観じて以て定心を取らんと欲せば、また、すべからく相似の境に対して観ずべし。すなわち定を得べきこと易し。行者等、静処において一椀水を取って、牀前の地上に著けて、好く満にこれを盛り、自身は牀上に在りて坐し、自の眉間に当って、一の白物の豆ばかりの大きさのごとくなるを著けて、頭を低れ面を水上に臨めて一心にこの白処を照し看よ。更に異縁すること莫れ。また、水初め地に在って波浪住せざるとき、面を臨めてこれを観るに面像を見ず。観を為すこと休まざれば漸漸に面、現ず。初めの時は面相、住せず、たちまち長く、たちまち短く、たちまち寛く、たちまち狭く、たちまち見え、見えず。この相、現ぜん時、更に、すべからく極細に用心すべし。久しからざる間に水波、微細にして、動に似て動ぜず。面相ようやく明らかに現ずることを得ん。面上の眼耳鼻口等を見るといえども、また、いまだ取るべからず、また、妨ぐべからず。ただ身心を縦ほしいままにして、有りと知りて取ること勿れ。ただ、白処を取りて了了に、これを観じて正念に守護せよ。失意異縁せしむること勿れ。これを見る時に当りて、心ようやく住することを得て、水性湛然なり。また、行者等、自心の中の水の、波浪住せざることを識知らんと欲せば、ただこの水の動と不動との相を観ぜよ。すなわち、自心の境の現と不現

と、明と闇との相を知らん。また、水の静かなる時を待って、一の米ばかりなるを取りて、水上に当て手に信せてこれを水中に投ぐれば、その水波すなわち動じて、椀内に徧ず。自面、上に臨めてこれを観るに、その白き者すなわち動ず。更に、豆ばかりなるを著って、これを投ぐれば水波更に大いにして、面上の白き者、あるいは見え見えず。乃至、棗等のもの、これを水に投ぐればその波、転た、大いにして、面上の白き者、および自身の頭面すべて皆隠没して現ぜず。水の動ずるに猶るが故なり。椀と言うは、すなわち身器に喩う。水と言うは、すなわち自らの心水に喩う。波浪と言うはすなわち、乱想煩悩に喩う。漸漸に波浪息むと言うは、すなわちこれ衆縁を制捨して、心を一境に住するなり。水静かなれば境現ずと言うは、すなわちこれ能縁の心、乱ること無ければ所縁の境動ぜず。内外恬怕にして所求の相顕然なり。また、細想および麤相あるは、心水のすなわち動ずるなり。心水すでに動ずれば静境すなわち失す。また細塵および麤塵これを寂静の水中に投ぐれば、その水の波浪すなわち動ず。また行者等、ただこの水の動と不動との相を看て、すなわち自心の住と不住とを識れ。また境現の失と不失と邪正等は一ら前の日観に同じ。また天親讃じて云く、「かの世界の相を観ずるに三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとく広大にして辺際無し」と。これすなわち総じてかの国地の分量を明す。二に「下有金剛七宝」より、

下「不可具見」に至る已来は、正しく地下の荘厳を明す。すなわち、その七有り。一には幢体等しくこれ無漏金剛なることを明し、二には地を擎げて相い顕映せる荘厳あることを明し、三には方楞具足を明して円相に非ざることを表す。四には百宝合成して、量、塵沙に出でたることを明し、五には、宝千光を出し、光無辺の際に周きことを明し、六には光に異色多く、色他方を照すに機に随いて変現して、時として益せざること無きことを明し、七には衆光彩を散じて、日輪に映絶す、新往の者のこれを覩て、にわかに周悉し難きことを明す。讃じて曰く「地下の荘厳七宝の幢、無量無辺無数億なり、八方八面百宝をもって成ぜり、かれを見るに無生自然に悟る。無生の宝国は永く常たり、一一の宝無数の光を流す、行者心を傾けて常に目に対すれば、騰神踊躍して西方に入る」。また讃じて曰く、「西方は寂静無為の楽なり、畢竟の逍遙有無を離れたり。大悲、心に熏じて法界に遊び、分身利物等しうして殊なること無し。あるいは神通を現じて説法し、あるいは相好を現じて無余に入る、変現の荘厳意に随いて出ず、群生見る者、罪皆除く」。また讃じて曰く、「帰りなん、去来、魔郷には停まるべからず、曠劫より来た流転して、六道ことごとく皆経たり、到る処、余楽無く、ただ愁歎の声のみを聞く、この生平を畢って、後かの涅槃の城に入らん」。三に「瑠璃地上」より、下「分斉分明」に至る已来は、正しく地上の荘厳、顕標

殊勝なることを明す。これ依持円浄を明す。七宝の池林等はこれ能依、瑠璃の宝地はこれ所依なり。地はこれ能持、池台樹等はこれ所持なり。これ弥陀の因行周備せるに由って、感報をして円明明浄の義あらしむることを致す。すなわち、無漏を体とす。讃じて云く、「宝地の荘厳比量無し、処処の光明十方を照す。宝閣華台皆徧満し、雑色胎朧として量るべきこと難し、宝雲宝盍空に臨んで覆い、聖衆通を飛して互に往来す。宝幢旛盍風に随いて転じ、宝楽輝を含んで念に応じて回る。惑疑を帯びて生ずれば華いまだ発けず、合掌籠籠として胎に処するに喩う、内法楽を受けて微苦無し、障尽くれば須臾に華自ら開く、耳目精明にして身金色なり、菩薩徐徐として宝衣を授く、光体に触るれば三忍を成ずることを得、すなわち、仏を見たてまつらんと欲して金台を下る、法侶迎将て大会に入らしむ、尊顔を瞻仰して善哉と讃ず」。「金縄」と言うより已下は、正しく黄金、道を作す状ち金縄に似たることを明す。あるいは雑宝を以て地とするには瑠璃を道と作し、あるいは瑠璃を以て地とするには白玉を道と作し、あるいは紫金、白銀を以て地とするには百宝を道と作し、あるいは不可説宝を以て地とするにはまた不可説宝を以て道と作し、あるいは千万宝を以て地とするには二三宝を道と作す。かくのごとく転た相い間雑し、転たともに合成し、転た相い照曜し、転た相い顕発す。光光色色各各不同なれども雑乱無し。行者等、ただ金

道のみ有って余宝道を作すこと無しと言うこと莫れ。四に「一一宝中 有五百 色光」より、下「楽器以為荘 厳」に至る已来は、正しく空裏の荘 厳を明す。すなわち、その六有り。一には宝より多光を出すことを明し、二には喩をもってその相を顕すことを明し、三には光り変じて台と成ることを明し、四には光 変じて楼閣と成ることを明し、五には光り変じて華幢と成ることを明し、六には光 変じて宝楽の音と成ることを明す。また、地上の雑宝一一に各 五百 色の光を出すに、一一の色光、空中に上り涌いて、一の光台と作る。一一の台の中に宝楼千万あって、各 一二三四乃至不可説宝を以て、以て荘 厳し合成を為すことを明す。「如華又如星 月」と言うは、仏 慈悲を以て、人の識らざらんことを畏る。故に喩を借りて以て、これを顕す。「於台両 辺各有百 億華幢」と言うは、宝地に衆多の光明あって無量なり。一一の光等、化して光台と作って空中に徧満す。行 者等、行 住 坐 臥常にこの想を作せ。五に「八種清 風」より、下「無我之音」に至る已来は、正しく光 変じ、楽音転じて説法の相を成すことを明す。すなわち、その三有り、一には八風、光より出ずることを明し、二には風光すなわち出でて、すなわち楽を鼓めて音を発することを明し、三には四到四真恒沙等の法を顕説することを明す。讃じて云く、「安楽国は清 浄にして、常に無垢輪を転ず、一念および一時に諸〳〵の群生を利益す。仏の諸〳〵の功徳を讃ずるに、分別の心有るこ

地想観

（地観）

と無し、能く速やかに功徳大宝海を満足せしむ」。六に「是為」より下は、総じて結す。上来六句の不同有りといえども、広く水観を明し竟んぬ。

三に地想観の中に就いて、またさきに挙し、次に弁じ、後に結す。すなわち、その六有り。一に「此想成時」よりは、正しく結前生後を明す。二に「一一観之」より、下「不可具説」に至る已来は、正しく観成の相を弁ずることを明す。すなわち、その六有り。一には心に一境を標して、総雑してこれを観ずることを得ざれということを明し、二には、すでに一境に専らなれば境すなわち現前す。すでに現前することを得れば、必ず明了ならしめよということを明し、三には境すでに心に現じなば、目を閉じ目を開くに守って失すること莫からしめよということを明し、四には身の四威儀に昼夜常に念ぜよ、ただ睡時を除いて憶持して捨てざれということを明し、五には心を凝すこと絶えざれば、すなわち浄土の相を見ることを明す。これを想心中の見と名づく、なお覚想有るが故に。六には想心ようやく微にして覚念頓に除き、正受と相応して三昧を証すれば、真にかの境の微妙の事を見る、何に由ってか、つぶさに説かんやということを明す。これ、すなわち地、広くして無辺なり。宝幢一に非ず、衆珍彩を曜かして、転変いよいよ多し、ここを以て物を勧めて心を傾けしむ、恒に目に対するがごとくせよ。三に「是為」より下は、総じて結す。四に「仏告阿難」より、下「説

是観地法」に至る已来は、正しく流通を勧発して、縁に随いて広く説かしむることを明す。すなわち、その四有り。一には告命を明し、二には勧めて仏語を持せしめ、広く未来の大衆の為に、前の観地の益を説けということを明し、三に機の堪受、堪信を簡ぶことを明す。この娑婆生死の身の八苦、五苦、三悪道の苦等を捨てんことを得んと欲して、聞いてすなわち信行せん者には身命を惜まず、急に為にこれを説け、もし一人の苦を捨て生死を出ずる者を得れば、これを真に仏恩を報ずと名づく。何を以ての故に、諸仏出世して種種に方便を以て、衆生を勧化したまうことは、ただ悪を制し福を修して人天の楽を受けしめんと欲するにあらざればなり。人天の楽は、なおし電光のごとし、須臾にすなわち捨て還って三悪に入りて、長時に苦を受く。この因縁に為りて、ただ勧めて、すなわち浄土に生ぜんことを求めしめ、無上菩提に向わしむこの故に、今時の有縁相い勧めて誓って浄土に生ぜしむる者は、すなわち諸仏本願の意に称う。もし楽って信行せざる者は、『清浄覚経』に云うがごとき、「もし人有りて浄土の法門を説くを聞いて、聞けども聞かざるがごとく、見れども見ざるがごとくなるは、まさに知るべし、これ等は始めて三悪道より来って罪障いまだ尽きず、これに為りて信向無きのみ。仏の言く、我れ説く、この人はいまだ解脱を得べからず」と。この『経』にまた云く、「もし人、浄土の法門を説くを聞かんに、聞いてすなわ

ち悲喜こもごも流れ、身の毛為竪者は、まさに知るべし、この人は過去にすでにかつて、この法を修習して、今、重ねて聞くことを得て、すなわち歓喜を生じ正念に修行して、必ず生ずることを得」と。四には正しく宝地を観じて、以て、心を住せしめよということを明す。五に「若観是地者」より、下「心得無疑」に至る已来は、正しく観の利益を顕すことを明す。すなわち、その四有り。一には法を指すにただ宝地を観ぜしめて、余境を論ぜざることを明し、二には無漏の宝地を観ずるに因って、能く有漏多劫の罪を除くことを明し、三には身を捨てて已後必ず浄土に生ずることを明し、四には修因正念にして、疑を雑ゆることを得ざれということを明す。往生を得といえども、華に含まれていまだ出でず。あるいは辺界に生じ、あるいは宮胎に堕す。あるいは大悲菩薩、開華三昧に入りたまうに因りて、疑障すなわち除き、宮華開発して身相顕然なり。法侶携え将いて仏会に遊ばしむ。これすなわち、心を注めて宝地を見れば、すなわち宿障の罪愆を滅し、願行の業すでに円かなり、命尽きて往かざらんかと疑うこと無れ。今すでにこの勝益を観る。更に勧めて邪正を弁知せしむ。六に「作是観」より已下は、正しく観の邪正を弁ずることを明す。邪正の義は前の日観の中にすでに説きぬ。上来六句の不同有りといえども、広く地観を明し竟んぬ。

四に宝樹観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわち、その十

有り。一に「仏告阿難」より、下「次観宝樹」に至る已来は、正しく告命して総じて観名を挙げ、前を結し後を生ずることを明す。二に「観宝樹」と言うは、重ねて観名を牒す。「一一観之」と言うより已下は、後観の相を生じて、正しく儀則を教う。これ弥陀の浄国は広闊無辺なり、宝樹宝林あに七行を以て量とせんやということを明す。今、「七重」と言うは、あるいは一樹有り、黄金を根とし、紫金を茎とし、白銀を枝とし、碼碯を条とし、珊瑚を葉とし、白玉を華とし、真珠を菓とす。かくのごときの七重互に根茎乃至華菓等を為せば七七、四十九重なり。あるいは一宝を一樹とする者あり、あるいは二三四乃至百千万億不可説宝を一樹とする者有り、この義『弥陀経義』の中にすでに広く論じ竟んぬ。故に「七重」と名づく。「行」と言うはかの国の林樹多しといえども、行行整直にして雑乱無し。「想」と言うはいまだ真観を閑いて自在に心に随がわざれば、要ず仮想に籍りて、以て心を住むればまさに能く証益あり。三に「一一」より、下「由旬」に至る已来は、正しく樹の体量を明す。これ諸〳〵の宝林樹、皆弥陀無漏心の中より流出す。仏心これ無漏なるに由るが故に、その樹もまた、これ無漏なることを明す。讃じて云く、「正道の大慈悲、出世の善根より生ず、浄光明満足すること鏡と日月輪とのごとし」。「量」と言うは一一の樹の高さ三十二万里なり。また、老死の者無く、また、小生の者無く、また、初生漸長の者無し。起る

こと、すなわち同時に、頓に起りて量数等斉し、何に意ぞ然るや。かの界は位、これ無漏無生の界なり。あに生死漸長の義有らんや。四に「其諸宝樹」より、下「以為映飾」に至る已来は、正しく雑樹雑厳雑飾の異相を明す。すなわちその四有り。一には林樹の華葉間雑して、同じからざることを明し、二には一一の根茎枝条菓等皆、衆宝を具すことを明し、三には一一の華葉、転た互に同じからず、瑠璃色の中より金色の光を出し、かくのごとく転た相い間雑することを明し、四には、更に一切の雑宝を将て、これを厳飾することを明す。また、讃じて云く、「諸〳〵の珍宝の性を備えて、妙荘厳を具足せり、無垢の光炎熾んに、明浄にして世間を曜す」。また讃じて云く、「弥陀の浄国、宝樹多し、四面に条を垂れて、天衣挂り繞れり、宝雲盍を含み、化鳥声を連ぬ、旋転して空に臨み、法音を奏して会に入る。他方の聖衆は響を聴て、以て心を開き、本国の能人は形を見て悟を取る」。五に「妙真珠網」より、下「色中上者」に至る已来は、正しく樹上空裏の荘厳の相を明す。すなわち、その七有り。一には珠網空より臨んで樹を覆うことを明し、二には網に多重あることを明し、三には宮殿の多少を明し、四には一一の宮内に諸〳〵の童子多きことを明し、五には童子の身に珠の瓔珞を服することを明し、六には瓔珞の光照の遠近を明し、七には光超上の色なることを明す。六に「此諸宝林」より、下「有七宝葉」に至る已来は、その林樹多し

といえども雑乱無く、華実開く時、内より出でざることを明す。これすなわち法蔵の因深くして、自然に有らしむることを致す。七に「一一樹葉」より、下「婉転葉間」に至る已来は、正しく華葉の色相同じからざることを明す。すなわち、その五有り。一には葉量の大小等しくして差別無きことを明し、二には葉より光色を出す多少を明し、三には疑って識らざらんことを恐れて、喩を借りて以て顕すに天の瓔珞のごとくなることを明し、四には葉に妙華有って、色天金に比し、相火輪に喩うることを明し、五には迭いに相い顕照して葉の間に婉転することを明す。八に「涌生諸菓」より、下「亦於中現」に至る已来は、正しく菓に不思議の徳用の相有ることを明す。すなわちその五有り。一には宝菓生ずる時、自然に涌出することを明し、二には喩を借りて、以て菓相を標することを明し、三には菓に神光有って、化して旛盍と成ることを明し、四には宝盍円明にして、内に三千の界を現ずるに依正の二厳、種種の相現ずることを明し、五には十方の浄土普く盍中に現ず、かの国の人天覩見せずということ無きことを明す。また、この樹量いよいよ高く、縦広いよいよ闊く、華菓衆多にして神変一に非ず。一樹すでに然なり。かの国に徧満せる所有る諸樹の菓、衆多なること、ことごとく皆かくのごとし、知るべし。一切の行者、行住坐臥に常にこの想を作せ。九に「見此樹已」より、下「分明」に至る已来は、観成の相を弁ず。すなわちそ

の三有り。一には観成の相を結することを明し、二には次第にこれを観じて雑乱することを得ざれということを明し、三には一一に心を起して境に住することを明す。まず樹根を観じ、次に茎枝乃至華菓を想し、次に網宮を想し、次に童子と瓔珞とを想し、次に葉量と華菓の光色とを想し、次に旛盍広く仏事を現ずることを想す。すでに能く一一次第にこれを観ぜば明了ならずということ無からん。十に「是為」より下は、総じて結す。これすなわち、宝樹暉を連ね、網簾殿に空し、華千色を分ち、菓他方を現ず。上来十句の不同有りといえども、広く宝樹観を明し竟んぬ。

五に宝池観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわち、その七有り。一に「次当想水」より已下は、総じて観名を挙ぐ。すなわち、これ前を牒して後を生ず。これ宝樹精なりといえども、もし池水無くんば、また、いまだ好と名づけず。一には世界を空しくせざらんが為にし、二には依報を荘厳せんが為にす。この義に為るが故に、この池渠の観有りということを明す。二に「極楽国土」より、下「如意珠王生」に至る已来は、正しく池数を明し、ならびに出処を弁ず。すなわち、その五有り。一には所帰の国を標指することを明し、二には池に八数の名有ることを明し、三には一一の池岸、七宝をもって合成することを明す。正しく宝光映徹通照するに由って、八徳の水、一ら雑宝の色に同じ、故に宝水と名づく。四にはこの諸〻の衆

宝池観

宝、体性柔軟なることを明し、五には八池の水、皆如意宝の中より出づるをもって、すなわち如意水と名づくることを明す。この水にすなわち八種の徳有り。一には清浄潤沢、すなわちこれ色入の摂なり。二には不臭、すなわちこれ香入の摂なり。三には軽、四には冷、五には軟、すなわちこれ触入の摂なり。六には美、これ味入の摂なり。七には飲時調適、八には飲已無患、これ法入の摂なり。この八徳の義は、すでに『弥陀義』の中に在りて、広く説き竟んぬ。また、讃じて云く、「極楽荘厳安養国、八徳の宝池流れて徧満す、四岸暉を含んで七宝を間え、水色分明にして宝光に映ず、体性柔軟にして堅触無く、菩薩徐ろに行いて宝香を散ず。宝香宝雲宝盍と成り、宝盍空に臨んで宝幢を覆う、宝幢の厳儀宝殿を囲め、宝殿の宝鈴珠網に垂る。宝網宝楽千重に転じ、機に随いて宝宮楼を讃歎す。一一の宮楼に仏会有り、恒沙の聖衆坐して思量す。願わくはこの有縁常に憶念せよ、命を捨てて同じく、かの法堂に生ぜん」。三に「分為十四支」より、下「以為底沙」に至る已来は、正しく池異溜を分って旋還して乱ること無きことを明す。すなわちその三有り。一には渠数の多少を明し、二には一一の渠岸黄金の色を作すことを明し、三には渠下の底沙、雑宝の色を作すことを明す。「金剛」と言うは、すなわちこれ無漏の体なり。四に「一一水中」より、下「尋樹上下」に至る已来は、正しく水に不思議の用有ることを明す。すなわち、その五有り。

一には別して渠名を指して、かの荘厳の相を顕すことを明し、二には渠内の宝華の多少を明し、三には華量の大小を明し、四には摩尼宝の水、華の間に流注することを明し、五には宝水、渠より出でて諸〻の宝樹を尋ねて上下するに無礙なり、故に如意水と名づくることを明す。五に「其声微妙」より、下「諸仏相好者」に至る已来は、正しく水に不可思議の徳有ることを明す。すなわちその二有り。一には宝水、華の間に流注して、微波相い触るるに、すなわち妙声を出して、声の中に皆妙法を説くことを明し、二には宝水岸に上りて、樹の枝条華葉菓等を尋ねて、あるいは上り、あるいは下る。中間に相い触るるに皆妙声を出して、声の中に皆妙法を説く。あるいは衆生の苦事を説いて菩薩の大悲を覚動して、勧めて他を引かしめ、あるいは人天等の法を説き、あるいは二乗等の法を説き、あるいは地前地上等の法を説き、あるいは仏地三身等の法を説くことを明す。六に「如意珠王」より、下「念仏法僧」に至る已来は、正しく摩尼に多く神徳有ることを明す。すなわちその四有り。一には珠王の内より金光を出すことを明し、二には光化して百宝の鳥と作ることを明し、三には鳥声哀雅にして、天楽も以て比方する無きことを明し、四には宝鳥音を連ねて、同声に念仏法僧を讃歎することを明す。然るに仏はこれ衆生の無上の大師なり。邪を除いて正に向わしむ。法はこれ衆生の無上の良薬なり。能く煩悩の毒病を断じて、法身清浄

ならしむ。僧はこれ衆生の無上の福田なり。ただ心を四事に傾け疲労を憚らざらしむれば、五乗の依果、自然に念に応じて所須にして至る。その宝珠、前には八味の水を生じ、後には種種の金光を出す。ただ闇を破し昏を除くのみに非ず。到る処に、能く仏事を施す。七に「是為」より下は、総じて結す。上来七句の不同有りといえども、広く宝池観を明し竟んぬ。

六に宝楼観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその十一有り。初めに「衆宝国土」と言うは、すなわちこれ総じて観名を挙げて、前を牒し後を生ず。これ浄土に宝流有って灌注すといえども、もし宝楼宮閣無くんば、また、いまだ精とせず、これに為って依報の荘厳、種種円備することを明す。二に「一一界上」と言うは、正しく宝楼の住処を明す。地界、かの国に徧すれば楼もまた窮り無し。三に「有五百億」と言うは、正しくその数を顕す。一界の上すでに然り。かの国に徧満して、また皆かくのごとし。知るべし。四に「其楼閣中」より、下「作天伎楽」に至る已来は、正しく閣内の荘厳を明す。五に「又有楽器」より、下「不鼓自鳴」に至る已下は、正しく楼外の荘厳を明す。宝楽空に飛んで、声法響を流す。昼夜六時に天の宝幢のごとく、思い無くして自事を成ず。六に「此衆音中」より、下「念比丘僧」に至る已来は、正しく楽、識無しといえども、すなわち、説法の能有ることを明す。

七に「此想成已」より、下「宝池」に至る已来は、正しく観成の相を顕すことを明す。これ心を専らにして境に住し宝楼を見んと悕って、剋念して移らざれば、上より荘厳すべて現ずることを明す。八に「是為」より下は、総じて結す。九に「若見此者」よりは、前の観の相を牒して、後の利益を生ず。十に「除無量」より、下「生彼国」に至る已来は、正しく法に依って観察すれば障を除くこと多劫なり。身器清浄にして仏の本心に応い、身を捨てて他世に必ず往くこと疑無きことを明す。十一に「作是観者」より、下「邪観」に至る已来は、観の邪正の相を弁ず。上来十一句の不同有りといえども、広く宝楼観を明し竟んぬ。

七に華座観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわち、その十九有り。一に「仏告阿難」より、下「除苦悩法」に至る已来は、正しく勅聴許説を明す。すなわち、その三有り。一には二人に告命することを明し、二には勅聴せしめ、これをして諦かに受け、正念に修行せしむることを明し、三には仏、為に華座の観法の、ただ能く心を住めて縁念すれば、罪苦除くことを得るを説きたまわんということを明す。二に「汝等憶持」より、下「解説」に至る已来は、正しく勧発流通を明す。これ観法深要にして、急に常没の衆生の妄愛迷心にして、六道に漂流するを救う。汝、この観を持して処処に勧修して、普く知聞して同じく解脱に昇ることを得せ

華座観

しめよということを明す。三に「説是語時」より、下「不得為比」に至る已来は、正しく、娑婆の化主は物の為の故に、想を西方に住せしめ、安楽の慈尊は情を知りたまうが故に、すなわち東域に影臨したまうことを明す。これ、すなわち、二尊の許応異なること無し、ただ、これ隠顕殊なること有り、正しく、器朴の類、万差なるに由って、互に郢匠たらしむることを致す。「説是語時」と言うは、正しく明す。この意の中に就いて、すなわちその七有り、一には二人に告勧する時を明し、二には弥陀声に応じて、すなわち現じて往生を証得することを明し、三には弥陀空に在って立ちたまうことは、ただ回心正念にして、我が国に生ぜんと願ずれば、立どころにすなわち、生ずることを得せしむることを明す。問うて曰く、仏徳尊高なり、輒然として軽挙したまうべからず。すでに能く本願を捨てず、来って大悲に応ぜば、何が故ぞ、端坐して機に赴かざる。答えて曰く、これ如来別に密意有ることを明す。ただし以れば、娑婆の苦界は雑悪同じく居し、八苦相い焼き、動すれば違返を成ず。詐親含笑して、六賊常に随い、三悪の火阬臨臨として入りなんと欲す。もし足を挙げて、以て迷を救わずんば、業繋の牢何に由ってか勉かるることを得ん。この義を為ての故に、立撮して、すなわち行って、端坐して以て機に赴くに及ばず。四には観音勢至、以て侍者と為って、余衆無きことを表することを明す。五には三尊、身心円浄なれば、光明いよいよ

盛んなることを明し、六には仏身の光明朗かに十方を照す。垢障の凡夫何ぞ能くつぶさに覩んということを明し、七には仏身無漏なれば、光もまた同じく然なり。あに有漏の天金を将て、これに比方せんやということを明す。四に「時韋提希見無量」より、下「作礼」に至る已来は、正しく、韋提は実にこれ垢凡の女質、言うべきに足らず。ただし以れば、聖力冥に加して、かの仏、現じたまう時、稽首することを蒙ることを得ることを明す。これすなわち、序には浄国に臨んで喜歎して、以て自ら勝うること無し。今はすなわち、正しく弥陀を観たてまつりて、更に、ますます心開けて忍を悟る。五に「白仏言」より、下「及二菩薩」に至る已来は、正しく、夫人、仏恩を領荷して、物の為に疑いを陳べて、後の問を生ずることを明す。これ夫人の意は仏、今、現に在せば尊の加念を蒙って弥陀を観たてまつることを得たり。仏滅後の衆生は云何してか見たてまつるべきやということを明す。六に「未来衆生」より、下「及二菩薩」に至る已来は、その夫人物の為に請を置して、己に同じく見せしめんということを明す。七に「仏告韋提」より、下「当起想念」に至る已来は、正しく、総告許説の言を明す。問うて曰く、夫人の請を置すには、己に通じて生の為にす。如来の酬答に至るに及んでただ韋提のみを指して生に通ぜざるや。答えて曰く、仏身化に臨んで、法を説いて以て機に逗ず、請せざるすら、なお自ら普く弘めたまう。何ぞ別して指す

ことを論じて、等しく備えざらん。ただ文、略せるを以ての故に、兼ねてこれが為にすること無し、心必ず有り。八に「七宝地上」より、下「華想」に至る已来は、正しく観の方便を教うることを明す。問うて曰く、衆生盲闇にして想を逐って労を増す。目に対するに冥きこと夜遊のごとし。遠く浄境を標す。何に由ってか悉らかにすべき。答えて曰く、もし衆生の惑障動念に望むれば、徒らに自ら疲労しなん。仰いで聖力の遙加を憑めば、所観をして皆見せしむることを致す。云何が、作法して心を住めて見ることを得せしむる。作法せんと欲せば、諸〳〵の行者等、まず仏像の前に至心に懺悔して、所造の罪を発露し、極めて慚愧を生じ悲泣して涙を流すべし。悔過すでに竟って、また心口に釈迦仏、十方恒沙等の仏を請じ、また、かの弥陀の本願を念じて言へ、弟子某甲等、生盲にして罪重く、障隔処り深し、願わくは仏の慈悲、摂受護念して指授開悟せしめたまえ、所観の境、願わくは成就することを得ん。今、頓に身命を捨てて、仰いで弥陀に属す。見ると見ざると、皆これ仏恩の力なりと。この語を道い已って、更に、また、至心に懺悔し竟已りなば、すなわち、静処に向って面を西方に向え正坐跏趺すること、一ら前の法に同じ。すでに心を住し已りなば、徐徐として心を転じて、かの宝地の雑色分明なるを想え。初想には多境を乱想することを得ざれ。すなわち、定を得難し。ただ方寸一尺等を観ぜよ。あるいは一日、二日、三日、

あるいは四五六七日、あるいは一月、一年、二三年等、日夜を問うこと無く行住坐臥、身口意業、常に定と合せよ。ただ万事ともに捨てて、なおし失意聾盲痴人のごとくなる者は、この定必ず、すなわち得易し。もしかくのごとくならざれば、三業縁に随いて転じ、定想波を逐って飛ぶ。たとい千年の寿を尽すとも、法眼いまだかつて開けじ。もし心に定を得る時は、あるいは、まず明相現ずることあり。あるいは、まず宝地等の種種分明なる不思議の者を見るべし。二種の見有り。一には想見。なお知覚有るが故に、浄境を見るといえども、いまだ多く明了ならず。二にはもし内外の覚、滅して、すなわち正受三昧に入る。所見の浄境、すなわち、想見に非ず。比挍とすることを得んや。九に「令其蓮華」より、下「八万四千光」に至る已来は、正しく、宝華に種種荘厳有ることを明す。すなわち、その三有り。一には一一の華葉、衆宝の色を備うることを明し、二には一一の葉に衆多の宝脈有ることを明し、三には一一の脈に衆多の光色有ることを明す。これ行者をして、心を住めて一一にこれを想せしめて、ことごとく心眼をして見ることを得せしむ。すでに、華葉を見已りなば、次に葉の間の衆宝を想い、次に宝、多光を出すに光、宝盍と成ることを想い、次に華台上の衆宝および珠網等を想い、次に台上の四柱の宝幢を想い、次に幢上の宝幔を想い、次に幔上の宝珠、光明、雑色にして虚空に徧満して、各〳〵異相を現ずることを想え。

かくのごとく、次第に一一に心を住めて捨てざれば、久しからざるの間に、すなわち定心を得。すでに定心を得ればかの諸〻の荘厳一切顕現す。知るべし。十に「了了」より下は、観成の相を弁ず。十一に「華葉小者」より、下「徧覆地上」に至る已来は、正しく、華葉に種種荘厳有ることを明す。すなわちその六有り。一には華葉の大小を明し、二には華葉の多少を明し、三には葉間の珠映の多少を明し、四には珠に千光有ることを明し、五には一一の珠光変じて宝盍と成ることを明し、六には宝盍、上虚空を照し、下、宝地を覆うことを明す。十二に「釈迦毘楞伽」より、下「以為交飾」に至る已来は、正しく台上の荘厳の相を明す。十三に「於其台上」より、下「妙宝珠以為映飾」に至る已来は、正しく幢上の荘厳の相を明す。すなわちその四有り。一には台上に自ら四幢有ることを明し、二には幢の体量の大小を明し、三には幢上に自ら宝幔有って、状、天宮に似たることを明し、四には幢上に自ら衆多の宝珠有って、輝光映飾することを明す。十四に「一一宝珠」より、下「施作仏事」に至る已来は、正しく珠光に不思議の徳用の相有ることを明す。すなわちその五有り。一には一一の珠に多光有ることを明し、二には一一の光、各〻異色を作すことを明し、三には一一の光色、宝土に徧することを明し、四には光の至る所の処、各〻異種の荘厳を作すことを明し、五にはあるいは金台、珠網、華雲、宝楽と作りて十方に徧満する

ことを明す。十五に「是為」より下は、総じて観名を結す。十六に「仏告阿難」より、下「比丘願力所成」に至る已来は、正しく華座得成の所由を明す。十七に「若欲念彼仏者」より、下「自見面像」に至る已来は、正しく重ねて観の儀を顕して、前のごとく次第に心を住して、雑乱することを得ざれということを明す。十八に「此想成者」より、下「生極楽世界」に至る已来は、正しく観成の相を結することを明す。すなわち、二の益有り。一には除罪の益を明し、二には得生の益を明す。十九に「作是観者」より、下「名為邪観」に至る已来は、正しく観の邪正の相を弁ずることを明す。これすなわち、華、宝地に依り、葉、奇珍を間え、台、四幢を瑩き、光、仏事を施す。上来十九句の不同有りといえども、広く華座観を明し竟んぬ。

八に像観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその十三有り。一に「仏告阿難」より、下「次当想仏」に至る已来は、正しく、前を結し、後を生ずることを明す。「所以者何」と言うは、これその問なり。すべからく仏を想すべき所以は何んとなり。二に「諸仏如来」より、下「心想中」に至る已来は、正しく、諸仏の大慈、心に応じてすなわち現じたまう、この勝益有るが故に、汝を勧めて、これを想せしむということを明す。問うて曰く、韋提、上の請には、ただ弥陀を指す、未審し、如来、今総じて諸仏を挙げたまう、何に意か有る。答えて曰く、諸仏は三身同

像観（像想観）

じく証し、悲智、果円かなること、等斉して二無し、端身一坐したまいてより影現無方なり。意、有縁に赴き、時、法界に臨むことを顕さんと欲す。法界と言うは三義有り。一には、心偏するが故に、法界を解す。二には身偏するが故に、法界を解す。三には障礙無きが故に、法界を解す。正しく、心到るに由るが故に、身また、随いて到る。身を心に随う、故に「是法界身」と言う。「法界」と言うはこれ所化の境、すなわち、衆生界なり。「身」と言うはこれ能化の身、すなわち、諸仏の身なり。「入衆生心想中」と言うは、すなわち、衆生、念を起して諸仏を見たてまつらんと願ずれば、仏、すなわち無礙智を以て知りたまうに由って、すなわち能くかの想心の中に入って現じたまう。ただ諸〻の行者、もしは想念の中、もしは夢定の中に仏を見たてまつる者は、すなわちこの義を成ず。三に「是故汝等」より、下「従心想生」に至る已来は、正しく利益を結勧することを明す。これ心を標して仏を想することを明す。ただ、仏解を作して、頂より足に至るまで心に想って捨てず、一一にこれを観じて、しばらくも休息すること無し。あるいは頂相を想い、あるいは眉間白毫、乃至、足下千輪の相を想え。この想を作す時、仏像端厳に相好具足して、了然として現じたまう。すなわち、心一一の相を縁ずるに由るが故に、すなわち、一一の相現ず。心もし縁ぜずんば、衆相見るべからず。ただ、自心に想作すれば、すなわち、心に応じて現ず。故

に「是心即是三十二相」と言う。「八十随形好」と言うは、仏相すでに現ずれば、衆好皆随う。これ、正しく、如来諸〳〵の想者をして具足して観ぜしむることを明す。「是心作仏」と言うは、自の信心に依って、相を縁ずること作のごとし。「是心是仏」と言うは、心能く仏を想すれば、想に依りて仏身現ず。すなわち、この心、仏なり。この心を離れて、外、更に異仏無ければなり。「諸仏正徧知」と言うは、これ、諸仏は円満無障礙智を得たまうをもって、作意と不作意とに、常に能く徧く、法界の心を知りたまう。ただ能く、想を作せば、すなわち汝が心想に従って、現じたまうこと、生ずるに似如たりということを明す。あるいは行者有り。この一門の義を将て、唯識法身の観と作し、あるいは自性清浄仏性の観と作す、その意はなはだ錯れり。絶えて少分も相い似たること無し。すでに、像を想えと言って三十二相を仮立せる者、真如法界の身、あに相有って縁ずべく、身有って取るべけんや。然るに法身は無色にして眼対を絶す。更に、類として方ぶべき無し。故に虚空を取りて、以て法身の体に喩う。また今この観門等は、ただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。すべて無相離念を明さず。如来、懸に知りたまう。末代罪濁の凡夫の、相を立てて心を住するすら、なお、得ること能わじ。何にいわんや、相を離れて事を求めば、術通無き人の空に居して、舎を立てんがごとしと。四に「是故応当」より、下「三仏陀」に

至る已来は、正しく前のごときの所益、専注すれば、必ず成ずるをもって、展転して相い教えて、勧めてかの仏を観ぜしむることを明す。五に「想彼仏者」よりは、前を牒して後を生ず。「先当想像」と言うは、所観の境を定む。六に「閉目開目」より、下「如観掌中」に至る已来は、正しく観成の相を弁ずることを明す。すなわちその四有り。一には身の四威儀、眼の開合に一の金像を見ること、目前に現ずるがごとくに、常にこの想を作せということを明し、二には、すでに能く像を観ず、像すなわちすべからく坐処有るべし、すなわち、前の華座を想して、像、上に在って坐したまうと想えということを明し、三には像の坐せるを想見し已りて、心眼すなわち開くことを明し、四には心眼すでに開けなば、すなわち、金像およびかの極楽の諸〻の荘厳の事を見るに、地上虚空了然として無礙ならんということを明し、また、像を観ずる住心の法は、一ら前に説くがごとし。頂より一一にこれを想して、面眉毫相、眼、鼻、口、耳、咽、項、肩、臂、手、指までにし、また心を抽んでて、上に向って、胸、腹、臍、陰、脛、膝、蹲、足、十指、千輪等を想え。一一にこれを想して、上より下に向うを順観と名づけ、下、千輪より上に向うを逆観と名づく。かくのごとく、逆順に心を住すれば、久しからずして、必ず成ずることを得。また、仏身および華座、宝地等も、必ずすべからく上下通観すべし。然るに十三観の中に、この宝地、宝華、

金像等の観、最も要なり。もし人に教えんと欲せば、すなわち、この法を教えよ。ただこの一法成じぬれば、余観すなわち自然に了す。七に「見此」より已下は、上の像身観を結成して、後の二菩薩観を生ず。八に「復当更作一大蓮華」より、下「坐右華座」に至る已来は、正しく上の三身観を成じて、後の多身観を生ずることを明す。この二菩薩を観ぜんと欲せば、一ら仏を観ずる法のごとくすべし。九に「此想成時」より、下「徧満彼国」に至る已来は、正しく上の多身観を結成して、後の説法の相を生ずることを明す。これ、諸〻の行者等、行住坐臥常に、かの国の一切の宝樹、一切の宝楼、華池等を縁ずることを明す。もしは礼念、もしは観想常にこの解を作せ。十に「此想成時」より、下「憶持不捨」に至る已来は、正しく定に因って極楽の荘厳を見ることを得、また一切の荘厳皆能く妙法を説くを聞く。すでに、これを見聞し已って、恒に持して失すること莫きを定心を守ると名づくことを明す。十一に「令与修多羅合」より、下「見極楽世界」に至る已来は、観の邪正の相を弁ず。十二に「是為」より下は、総じて結す。十三に「作是観者」より、下「得念仏三昧」に至る已来は、正しく剋念して観を修すれば、現に利益を蒙るということを明す。これ、すなわち、群生障重くして、真仏の観、階い難し。ここを以て、大聖哀を垂れて、しばらく心を形像に注めしむ。上来十三句の不同有りといえども、広く像観を明し竟ん

ぬ。

九に真身観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその十二有り。一に「仏告阿難」より、下「身相光明」に至る已来は、正しく告命して、前の像観を結成し、後の真身の観を生ずることを明す。二に「阿難当知」より、下「金色」に至る已来は、正しく真仏の身相、天金の色に踰えたることを顕すことを明す。三に「仏身高六十」より、下「由旬」に至る已来は、正しく身量の大小を明す。四に「眉間」より、下「菩薩為侍者」に至る已来は、正しく総じて身相を観ずることを明す。すなわちその六有り。一には毫相の大小を明し、二には眼相の大小を明し、三には毛孔光の大小を明し、四には円光の大小を明し、五には化仏の多少を明し、六には侍者の多少を明す。五に「無量寿仏」より、下「摂取不捨」に至る已来は、正しく身の別相を観ずるに光、有縁を益することを明す。すなわちその五有り。一には相の多少を明し、二には好の多少を明し、三には光の多少を明し、四には光照の遠近を明し、五には光の及ぶ所の処、偏に摂益を蒙ることを明す。問うて曰く、つぶさに衆行を修するに、ただ能く回向すれば皆、往生を得。何を以てか、仏光普く照すに、ただ念仏の者のみを摂する、何に意か有る。答えて曰く、これに三義有り。一には親縁を明す。衆生、行を起して、口常に仏を称すれば、仏すなわち、これを聞きたまう。身常に仏を

礼敬すれば、仏すなわち、これを見たまう。心常に仏を念ずれば、仏すなわち、これを知りたまう。衆生、仏を憶念すれば、仏また、衆生を憶念したまう。彼此の三業相い捨離せず、故に親縁と名づく。二には近縁を明す。衆生、仏を見んと願ずれば、仏すなわち、念に応じて、現に目前に在す。故に近縁と名づく。三には増上縁を明す。衆生称念すれば、すなわち多劫の罪を除く命終らんと欲する時、仏、聖衆とともに自ら来って迎接したまう。諸〻の邪業繫、能く礙る者無し。故に増上縁と名づく。自余の衆行も、これ善と名づくといえども、もし念仏に比すれば、全く比挍に非ず。この故に諸経の中、処処に広く念仏の功能を讃ず。『無量寿経』の四十八願の中のごとき、ただ、専ら弥陀の名号を念じて生ずることを得ることを明す。また、『弥陀経』の中のごとき、一日七日、専ら弥陀の名号を念じて生ずることを得。また、十方恒沙の諸仏、不虚を証誠したまう。またこの『経』の定散の文の中に、ただ、専ら名号を念じて生ずることを得ることを標す。この例、一に非ず。広く念仏三昧を顕し竟んぬ。六に「其光相好」より已下は、少を結して多を顕す。すなわち、観ぜんと欲せば周悉を為し難し。七に「但当憶想」より已下は、正しく荘厳微妙にして凡境に出過す。いまだ目前に証せずといえども、ただ、まさに憶想して心眼をして見せしむべしということを明す。八に「見此事者」より、下「摂諸衆生」に至る已来は、正しく功

呈れて失せず、観益成ずることを得ることを明す。すなわちその五有り。一には観に因って十方の諸仏を見ることを得ることを明し、二には諸仏を見たてまつるを以ての故に、念仏三昧を結成することを明し、三にはただ一仏を観ずるに、すなわち、一切の仏身を観ることを明し、四には仏身を見るに由るが故に、すなわち、仏心を見ることを明し、五には仏心は慈悲を体とし、この平等の大慈を以て、普く一切を摂することを明す。九に「作此観者」より、下「得無生忍」に至る已来は、正しく身を捨てて他世に、かしこに生ずる益を得ることを明す。十に「是故智者」より、下「現前授記」に至る已来は、重ねて修観の利益を結勧することを明す。すなわちその五有り。一には、能く観を修する人を簡出することを明し、二には専心に無量寿仏を諦観することを明し、三には相好衆多なり。総雑して観ずることを得ざれ、ただ白毫の一相を観ぜよ。ただ白毫を見ることを得れば一切の衆相自然に現ずということを明し、四には、すでに弥陀を見たてまつれば、すなわち、十方の仏を見たてまつることを明し、五には、すでに諸仏を見たてまつれば、すなわち、定中において授記を蒙ることを得ることを明す。十一に「是為徧観」より已下は、総じて結す。十二に「作此観」より已下は、正しく観の邪正の相を弁ずることを明す。これすなわち、真形、量遠して、毫、五山のごとし、震響機に随いて光、有識を沾す。含霊をして帰命し注想して遺る

ること無く、仏の本弘に乗じて、斉くかの国に臨ましめんと欲す。上来十二句の不同有りといえども、広く真身観を明し竟んぬ。

十に観音観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその十五有り。一に「仏告阿難」より、下「菩薩」に至る已来は、正しく前の真身観を結成し、後の菩薩観を生ずることを明す。二に「此菩薩身長」より、下「皆於中現」に至る已来は、正しく総じて身相を標することを明す。すなわちその六有り。一には身量の大小を明し、二には身色、仏と同じからざることを明し、三には肉髻、仏の羸髻と同じからざることを明し、四には円光の大小を明し、五には化仏、侍者の多少を明し、六には身光に普く五道の衆生を現ずることを明す。三に「頂上毘楞伽」より、下「二十五由旬」に至る已来は、正しく天冠の内の化仏の殊異なることを明す。四に「観音」より已下は、正しく面色、身色と同じからざることを明す。五に「眉間」より、下「蓮華色」に至る已来は、正しく毫光転変して十方に徧満し、化侍いよいよ多くして、更に紅蓮の色に比すことを明す。すなわちその五有り。一には毫相、七宝の色を作すことを明し、二には毫光の多少を明し、三には光に化仏有る多少を明し、四には侍者の多少を明し、五には化侍変現して十方に徧満することを明す。六に「有八十億光明」より、下「荘厳事」に至る已来は、正しく身服の光瓔、衆宝の作に非ざることを明

す。七に「手掌 作五百 億」より、下「接 引衆生」に至る已来は、正しく手に慈悲の用有ることを明す。すなわちその六有り。一には手掌、雑蓮の色を作すことを明し、二には一一の指端に八万印文有ることを明し、三には一一の文に八万余の色有ることを明し、四には一一の色に八万余の光有ることを明し、五には光体柔 軟にして、等しく一切を照すことを明し、六にはこの宝光の手を以て有縁を接 引することを明す。八に「挙足時」より、下「莫不弥満」に至る已来は、正しく足に徳用の相有ることを明す。九に「其余身相」より已下は、指して仏に同ず。十に「唯頂 上」より、下「不及世尊」に至る已来は、正しく師徒、位別にして果願いまだ円ならざれば、二相をして虧くること有らしむることを致すは、不足の地に居することを表す、ということを明す。十一に「是為」より下は、総じて結す。十二に「仏告阿難」より、下「当作是観」に至る已来は、正しく、重ねて前の文を結してその後の益を生ずることを明す。十三に「作是観者」より、下「何況 諦観」に至る已来は、正しく観の利益を勧むることを明す。十四に「若 有欲観観音」より、下「如観掌 中」に至る已来は、正しく重ねて観儀を顕し、物を勧めて心を傾けて、両 益に沾さしむることを明す。十五に「作是観」より已下は、正しく観の邪正の相を弁することを明す。これすなわち、観音、願重くして十方に影現し、宝手、輝を停めて機に随いて引接す。上 来十 五句の

不同有りといえども、広く観音観を明し竟んぬ。

十一に勢至観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその十三有り。一に「次観大勢至」より已下は、総じて観名を挙ぐ。二に「此菩薩身量大小」より已下は、次に観の相を弁ず。すなわちその五有り。一には身量、観音に等類することを明し、二には身色、観音に等類することを明し、三には面相、観音に等類することを明し、四には身光、相好、観音に等類することを明し、五には毫相、光を舒べて、転変すること観音に等類することを明す。三に「円光面各百二十五由旬」より已下は、正しく円光等、観音に同じからざる相を明す。すなわちその四有り。一には円光の大小を明し、二には光照の遠近を明し、三には化仏の多少を明し、四には化仏の侍者の多少を明す。四に「挙身光明」より、下「名大勢至」に至る已来は、正しく、身光遠く備えて、有縁を照益し、等しく他方に及ぶまで、皆紫金の色と作すことを明す。すなわちその八有り。一には身光の総別の不同を明し、二には光照の遠近を明し、三には光の触るる所の処、皆紫金の色と作ることを明し、四にはただ勢志と宿業、縁有る者のみ、すなわちこの光を覩触することを得ることを明し、五にはただ一毛孔の光を見れば、すなわち、能く多く諸仏の浄妙の身光を見ることを明す。これすなわち、少しを挙げて以て多益を顕して、これを行ずる者をして、悕心渇仰して、入観せ

しめて以てこれを証せしめんと欲す。六には光に依って、以て名を立つることを明し、七には光の体用を明す。すなわち、無漏を体とし、故に智恵光と名づく。また、能く十方三悪の苦を除息するを無上力と名づく。すなわち、これ用なり。八には大勢志と名づくことは、これすなわち、徳に依って名を立つることを明す。五に「此菩薩天冠」より、下「皆於中現」に至る已来は、正しく天冠の荘厳の相、観音と同じからざることを明す。すなわちその四有り。一には冠上の宝華の多少を明し、二には一一の華上の宝台の多少を明し、三には一一の台の中に十方諸仏の浄土を映現することを明し、四には他方の土、現ずれども彼此すべて増減無きことを明す。六に「頂上肉髻」より、下「普現仏事」に至る已来は、正しく肉髻の宝餅の相を明す。七に「余諸身相」より已下は、指して観音に同ず。八に「此菩薩行時」より、下「如極楽世界」に至る已来は、正しく行のとき観音と同じからざる相を明す。すなわちその四有り。一には行不同の相を明し、二には震動遠近の相を明し、三には震動する所の処に、華現ずること多きことを明し、四には現ずる所の華、高くして、かつ顕れ、多諸の瑩飾、以て極楽の荘厳に類することを明す。九に「此菩薩坐時」より、下「度苦衆生」に至る已来は、正しく坐するとき観音に同じからざる相を明す。すなわちその七有り。一には坐する相を明し、二にはまず本国を動ずる相を明し、三には次に他方を動ずる遠近

の相を明し、四には下上の仏刹を動揺する多少の相を明し、五には弥陀、観音等の分身雲集したまう相を明し、六には空に臨んで側塞して、皆宝華に坐することを明し、七には分身の説法、各〳〵所宜に応ずることを明す。問うて曰く、『弥陀経』に云く、「かの国の衆生、衆苦有ること無く、ただ諸楽を受く、故に極楽と名づく」と、何が故ぞ、この『経』の分身の説法に、すなわち苦を度すと云えるは、何に意か有る。答えて曰く、今、苦楽と言うは二種有り。一には三界の中の苦楽、二には浄土の中の苦楽。三界の苦楽と言うは、苦は、すなわち三塗八苦等。楽は、すなわち人天五欲、放逸、繫縛等の楽なり。これ楽と言うといえども、然もこれ大苦なり。必竟じて、一念真実の楽有ること無し。浄土の苦楽と言うは、苦は、すなわち地前を地上に望めて苦とし、地上を地前に望めて楽とし、下智証を上智証に望めて苦とし、上智証を下智証に望めて楽とす。この例、一を挙ぐるに知んぬべし。今、「度苦衆生」と言うは、ただ、これ下位を進めて上位に昇らしめ、下証を転じて上証を得しむ。本の所求に称うを、すなわち名づけて楽とす。故に「度苦」と言う。もし然らずんば、浄土の中の一切の聖人は、皆無漏を以て体とし、大悲を用とす。畢竟常住にして分段の生滅を離れたり。更に、何の義に就いてか、名づけて苦とせん。十に「作此観者」より、下「十一観」に至る已来は、正しく観の邪正を弁じ、総じて分斉を結することを明す。十一

に「観此菩薩者」より已下は、正しく修観の利益、罪を除くこと多劫なることを明す。十一に「作此観者」より、下「浄妙国土」に至る已来は、正しく総じて前の文を結し、重ねて後の益を生ずることを明す。十三に「此観成」より已下は、正しく総じて二身を牒して観成の相を弁ずることを明す。これ、すなわち勢志、威高くして、坐するに他国を揺るがし、能く分身をして雲集して、法を演べて生を利し、永く胞胎を絶ちて、常に法界に遊ばしむ。上来十三句の不同有りといえども、広く勢至観を解し竟んぬ。

十一に普観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその六有り。一に「見此事時」より已下は、正しく前を牒し後を生ずることを明す。二に「当起自心」より、下「皆演妙法」に至る已来は、正しく心を凝らし観に入りて、すなわち、常に自らの往生の想を作すことを明す。すなわちその九有り。一には自生の想を明し、二には西に向う想を明し、三には華に坐する想を明し、四には華の合する想を明し、五には華の開く想を明し、六には宝光来って身を照す想を明し、七には、すでに光照を蒙って眼開く想を作すことを明し、八には眼目すでに開けて、仏菩薩を見たてまつる想を作すことを明し、九には法を聞く想を明す。三に「与十二部経合」より、下「不失」に至る已来は、正しく定散に遺るること無く、心を守りて、常に憶

普観（普想観）

することを明す。一には、すなわち、観心、明浄なり。二には、すなわち、諸悪生ぜず、内、法楽と相応し、外、すなわち、三邪の障無きに由ってなり。四に「見此事已」より下は、観成の益を明す。五に「是為」より下は、総じて結す。六に「無量寿」より、下「常来至此行人之所」に至る已来は、正しく重ねて能観の人を挙げて、すなわち、弥陀等の三身の護念の益を蒙ることを明す。これすなわち、群生、念を注めて見んと願ずれば、西方の依正二厳了了として、常に眼に見るがごとし。上来六句の不同有りといえども、広く普観を解し竟んぬ。

十三に雑想観の中に就いて、またまず挙し、次に弁じ、後に結す。すなわちその十一有り。一に「仏告阿難」より已下は、正しく告命し、結勧して、後を生ずることを明す。二に「先当観於一丈六」より已下は、正しく像を観じて以て、真を表し、水を想して、以て地を表することを明す。これはこれ、如来諸〳〵の衆生をして、境を易へ、心を転じて観に入らしめたまう。あるいは池水華上に在し、あるいは宝宮宝閣の内に在し、あるいは宝林宝樹の下に在し、あるいは宝台宝殿の中に在し、あるいは虚空宝雲華盍の内に在す。かくのごとき等の処、一一心を住めてこれを想して、皆、化仏の想を作さしむ。機境相い称いて成ずることを得易からしめんが為の故なり。三に「如先所説」より、下「非心力所及」に至る已来は、正しく境大いに、心小さくして、卒

雑想観

に成就し難ければ、聖意をして悲傷して、勧めて小を観ぜしむることを致すことを明す。四に「然彼如来」より、下「必得成就」に至る已来は、正しく凡心は狭小に、聖量はいよいよ寛くして、想を注むるに由し無し、恐らくは成就し難からんことを。これすなわち、小を以ての故に成じ難きにあらず、大に由るが故に現ぜざるにあらず、ただこれ、弥陀の願重くして、想する者をして皆成ぜしむることを致すことを明す。五に「但想仏像」より、下「具足身想」に至る已来は、正しく比挍して勝を顕すことを明す。像を想するすら、なお自ら福を得ること無量なり、何にいわんや、真仏を観ぜん者、益を得る功、更にはなはだし。六に「阿弥陀」より、下「丈六八尺」に至る已来は、正しく能く所観の仏像を観ずるに、身に大小有りといえども、明かに、皆これ真なることを明す。すなわちその三有り。一には弥陀の身通無礙にして、意に随いて徧周することを明す。如意と言うは二種有り。一には衆生の意のごとし。かの心念に随いて、皆応じてこれを度す。二には弥陀の意のごとし。五眼円かに照し、六通自在にして機の度すべき者を観じて、一念の中に前無く後無く、身心等しく赴き、三輪開悟せしめて、各〳〵益すること同じからず。二にあるいは大身を現じ、あるいは小身を現ずることを明し、三には身量に大小有りといえども、皆真金の色を作すことを明す。これすなわち、その邪正を定む。七に「所現之形」より已下は、正しく、身に大

小殊なること有りといえども、光相は、すなわち、真と異なること無きことを明す。八に「観世音菩薩」より已下は、正しく指して前観に同ずることを明す。仏大なれば侍者もまた大なり。仏小なれば侍者もまた小なり。九に「衆生但観首相」より已下は、正しく勧めて二別を観ぜしむることを明す。云何が二別なる。観音の頭首の上には一立の化仏有り、勢志の頭首の上には一の宝缾有り。十に「此二菩薩」より已下は、正しく弥陀観音勢志等しく、宿願、縁重く、誓同じくして、悪を捨て、等しく菩提に至るまで影響のごとく、相い随いて遊方化益したまうことを明す。十一に「是為」より下は、総じて結す。上来十一句の不同有りといえども、広く雑想観を解し竟んぬ。

上、日観より、下、雑想観に至る已来は、総じて世尊、前の韋提第四の請に「教我思惟正受」と云える両句を答えたまうことを明す。

総じて讃じて云く、初めに日観を教えて昏闇を除かしめ、水を想いて氷と成して内心を浄む。地下の金幢相い映発し、地上の荘厳、億万重、宝雲宝盍空に臨んで転じ、人天の音楽互に相い尋げり。宝樹瓔を垂れて、菓に間雑り、池徳水を流して華中に注ぐ。宝楼宝閣皆相い接し、光光相い照して等しくして蔭無し。三華独り迥にして衆座に超え、四幢縵を承けて網珠羅なる。稟識心迷いて、なおいまだ暁めず、心を住して像を

観じて、静かにかれに坐せしむ。一念心開けて真仏を見れば、身光相好転たいよいよ多し。救苦の観音法界を縁じて、時として変じて娑婆に入らずということ無し。勢志の威光、能く震動し、縁に随いて照摂して弥陀に会せしむ。帰りなん去来、極楽は身を安ずるに、実にこれ精なり。正念に西に帰って華含むと想え、仏と荘厳とを見るに説法の声あり。また衆生有って心に惑を帯す、真の上境を縁ずるに恐らくは成じ難からんことを、如来をして漸観を開かしむることを致す。華池、丈六等の金形、変現の霊儀、大小ありといえども、物の時宜に応じて有情を度す。普く同生の知識等を勧む、専心に念仏して、西に向って傾け。

また、前の請の中に就いて、初め日観より下、華座観に至る已来は、総じて依報を明し、二に像観より下、雑想観に至る已来は、総じて正報を明す。上来依正二報の不同有りといえども、広く定善一門の義を明し竟んぬ。

観経正宗分定善義巻第三